

高齢者の色覚における色の目立ちと照度の影響

芦澤昌子 岩戸純子 潮見弘子 野沢光代*

(青葉学園短大 * 聖ヶ丘教育福祉専門学校)

「目的」 高齢化社会となり環境デザインの面では高齢者に見やすい表示を心がける必要があり、また高齢者が見やすい色とはどんな色かを求める必要がある。高齢者の視覚特性は、短波長光の透過率の減少、眼内散乱の増大による変化が指摘されている。高齢運転者の増加している現状に置いて歩行者の安全の面ではどのような色が見やすいのかを知る必要があり、高齢者が目立つと感ずる色とはどのような色か、安全を目的にデザインに活用するデータを収集し若年と比較しどの位の差があるかを求めた。

「方法」 71才～87才までの高齢者男女3名ずつを被験者とした。実験は条件を同じにするため高齢者の家に実験装置を組立て行った。照度は500 lx～0.01 lxで色票は12色である。実験は照度レベルを変化させ目立つ色を求め、さらに等価明度を求めた。一人5セッションづつ行った。

「結果」 ① 3名ずつの男女の性差は無かった。②若年者の明所視では8R4/14の赤色が最も目立ち一致率が高かったが、高齢者は10RP4/12を選ぶ人もあり8Rの一致率は若者に比し低かった。③照度レベルの影響は色の目立ちの形状から高齢者の方がメソピックの状態に早くはいる。桿体が入ってくる照度が若者より早い。つまり明るさ感に若者と違いが見られる。④目立つ色には若者と高齢者で大きな違いはない。